PARK SEONG TAE
朴 成 泰

| | |
|---|---|
| 学位の種類 | 博　士（国際文化） |
| 学位記番号 | 国博　第　31　号 |
| 学位授与年月日 | 平成16年３月25日 |
| 学位授与の要件 | 学位規則第４条第１項該当 |
| 研究科・専攻 | 東北大学大学院国際文化研究科（博士課程後期３年の課程）<br>国際文化交流論専攻 |
| 学位論文題目 | 日・韓の自然発話データに基づく対照談話分析<br>── 言いよどみ・重なり・あいづちを中心にして ── |
| 論文審査委員 | （主査）<br>教　授　佐々木　克　夫　　教　授　小　野　尚　之<br>助教授　堀　江　　薫<br>助教授　中　本　武　志 |

# 論文内容の要旨

## 0．はじめに

現在は国際化時代であり、異文化の人と母語または外国語を用いて異文化間コミュニケーションを行なう機会も次第に増えている。例えば、韓国人日本語学習者が日本語母語話者と会話をする際、自然なコミュニケーションが図られていないと感じることが多々ある。その原因はいくつか考えられるが、自然なコミュニケーションに重要な要素である「言いよどみ」「重なり」「あいづち」の使用が適切に行なわれていないのではないだろうか。

そこで、本研究では、日本語母語話者、韓国語母語話者、日本人韓国語学習者、韓国人日本語学習者による「グループディスカッション」「１対１の対話」「電話会話」を自然発話データとして収集する。そして、それを基にして、日本語と韓国語の発話に現れる言語現象のうち、「言いよどみ(filler)」「重なり(overlap)」「あいづち(back-channel)」の実態を明らかにするとともに、日韓の対照研究を試みる。

## 1．研究の目的

日本と韓国は、地理的にみても一番近い国であり、文化交流においても長い歴史を持っている。一般に、日本語と韓国語は他言語に比べ、類似点が多いと言われている。ホン(홍)（1995）は、日韓両言語は言語類型的に非常に近接していると述べている。例えば、統辞的・形態論的にはSOV言語であることや形容詞が動詞の一種として活用すること、また、膠着語（agglutinative language）として後置的特徴が顕著なことなどが挙げられる。ところが、堀江（1998）は、「日韓両言語のコミュニケーションスタイルや文化における相違点、文レベル以上の談話対照研究については、ほとんど行なわれていない」と指摘している。

本研究では、日韓両言語における3種類の自然発話データに基づき、「言いよどみ」「重なり」「あいづち」に焦点をあてて、日本語母語話者や韓国語母語話者が同文化内の母語話者同士で話している場合、異母語話者と母語で話している場合、異母語話者と外国語で話している場合について比較検討を行なう。そして、グループディスカッション、1対1の対面対話、電話会話といった談話の種類が異なることによって、相違が見られるか否かを調査することを目的として定め、日韓の対照談話分析を行なう。

## 2．先行研究

### 2.1　言いよどみの定義及び先行研究

言いよどみは、使われる用語が学者によって異なる。例えば、橋内（2000）、小出（1983）では「言いよどみ」、野村（1996）では「フィラー(filler)」という語を用いている。その他、ヘジテイション(hesitation)、遊び言葉、無意味語、冗長語、間投詞などが挙げられる。これらは、いずれも同一の概念であるが、未だ用語が定まっていないのが現状である。本研究では、言いよどみという語を用いることにする

『日本国語大辞典』(2000）には、言いよどみを「すらすらと言葉が出ないで口ごもる。言いかけてためらう」と書かれている。また、Maclay & Osgood（1959）は、言いよどみ現象については、発話時の反復・言い直し・有声休止（filled pause）・無声休止（unfilled pause）と定義している。次に、橋内（2000）は、「発話の最中に、日本語の場合には「あの」「ええと」、英語の場合には 'hem' や 'well' といったフィラー(filler）を挟めて口ごもったり、前言を撤回すべく言い直したりして発言を自ら修正するものである」と述べている。また、野村（1996）は「本来の語彙的な意味から離れて用いられ、それを取り除いても発話全体の命題的な意味が変わらないような語句」であると述べている。そして、山根（2002）では、言いよどみについて「それ自身命題内容を持たず、かつ他の発話と狭義の応答関係・接続関係を持たない、発話の一部分を埋めることば」と定義している。

小出（1983）は、言いよどみの要因と役割について考察した。それによると、言いよどみが生じる要因は「内容を明晰に伝える」「場への適切さを保つ」であると述べている。また、言いよどみの役割は「話の速度を下げ、全体として話の丁寧度を増加させる」「話を始める時、やりとりを和らげる」と指摘している。また、Maynard（1989）は、fillers の機能について、沈黙を無くす、話の継続を示唆する、発話を和らげるなどの役割を果たすと述べている。

山根（2002）は、講演会の談話、留守番電話の談話、対話、電話の資料を用いて日本語の言いよどみの種類・役割・出現位置などについて考察している。また、談話の種類は、言いよどみに影響を及ぼす要素にならないといういくつかの先行研究とは異なっており、談話の種類が言いよどみに影響を及ぼす要素になり得ることを明らかにしている。そして、言いよどみについて、「どの研究においても若干の記述に止まっている」と指摘している。言いよどみの機能については、発話権保持・注意喚起・時間稼ぎ・話者交替・心的態度などに分類している。本研究では、山根（2002）の分類に従い、言いよどみの機能や音声面について分析を行なう。

## 2.2　重なりの定義及び先行研究

重なりに関して、本田（1999, 2002）は、ある一時点において複数の話者が音声を発している時、その時点で発話の重なりが起こったということになる、と述べている。従って、重なりはあくまでも、複数の話者の発した音声が物理的に重なった現象を示すものとして質的なものは問わない、としている。ただし、拍手、足踏み、衣服のすれる音、物を食べたり、飲んだりする音など発話を目的としない音は、発話と同時に発生しても、重なりとはしていない。

本田（1999, 2002）では、重なりの種類を分類し、まとめている。その分類は、「付加・倒置」「先取り」「遅れ」「早すぎ」「割り込み」「同時発話」となっているが、本研究では、「繰り返し」と「途中」を加えて、重なりの種類を分類する。

本田（1999）では、重なりの中に、発話の途中に聞き手が行なう「ああ」「はい」「ええ」などの話を聞いていることを示す機能しか持たないような短い発話も含めている。あいづちは、会話における重なりの中では最も頻度が高い。そして、あいづちの定義や機能など、考えるべきことは多としているにもかかわらず、聞き手のあいづちは考察の対象とはしていない。また、本田（2002）では、あいづちも重なりの一部として、考察の対象に含めるが、集計の際にはあいづちを除いた重なりのみを対象としている。このように、あいづちは重なりと密接な関係にあるが、あいづちを重なりの一部として考察に加えるか否かは定説がない。しかし、実際の重なりを観察すると、かなり高い頻度であいづちによる重なりが含まれている。そこで、本研究では、あいづちも重なりの一部として含めて分析を行なう。

次に、ザトラウスキー（1993）は、話者交替と関連させて重なりについて次のように述べている。

会話の参加者Aが話をしたり止めたり、また、別の参加者Bが話をしたり止めたりして、A－B－A－Bのような形式で続いていくことによって、「話者交替（turn-taking）」が起こる。その際、2人以上の参加者が同時に話すことを重なりと呼んでいる。

また、橋内（2000）も話者交替と関連付けて、重なりは発話における現話者と次の話者の交替時に起こり、頻繁に現れるが、円滑なコミュニケーションを妨げることはない、としている。また、自由で活発な会話では話者の入れ替わりが激しく、頻繁に発話の重なりが起きるだけではなく、間髪を入れずに話者交替も生じる。

### 2.3　あいづちの定義及び先行研究

あいづちを取り上げる際、まず、どのような表現形式をあいづちと考えるかということを明記しておく必要がある。そこで、あいづちの種類について概観することにする。

松田（1988）は、あいづちには、言語行動と非言語行動があると述べている。言語行動というのは、言葉によって発話される表現である。一方、非言語行動としては、うなずきのような首振り、笑いや驚き表情などの言語によらない身振りである。言語行動と非言語行動は、必ずしも別々に生じるものではなく、同時に見られることがしばしばあると指摘している。また、メイナード（1987, 1999）では、あいづちとは話し手が発話権を使用している間に聞き手が送る短い表現であると言っている。

まず、あいづちの言語行動については、小宮（1986）によると、応答表現の中で、話し手の発話に対して自由意志に基づいて単に「聞いている」「わかった」などという意味で用いられるものであるという。ここで、自由意志に基づくというのは、その応答が相手に要求されたものではないという意味である。そして、堀口（1988）は、「はい」「ええ」「うん」「ああ」「へえー」「そうですか」「なるほど」といったあいづち詞と呼ばれる形式であると定義している。

あいづちの非言語表現としては、笑い、うなずきなどが挙げられる。うなずきをあいづちの枠組みに加えた研究は、窪田（1999）などがあり、笑いについては、山本（1992）などがある。しかし、本研究では、このような非言語表現はあいづちには含めないことにする。

次に、あいづちの機能として、「聞いていることを示す」「理解していることを示す」といった2つの機能は、ほとんどの研究で一致している。この2つの機能の他には、堀口（1988）、松田（1988）、ザトラウスキー（1993）などによると、「同意していることを示す」「否定的な意見、感情を表示する」「訂正、要求などをする」「間を持たせる」などが挙げられる。

## 3．研究方法

### 3.1　データ収集

本研究では、できるだけ自然な発話データを得るため、日本語母語話者および韓国語母語話者による、グループディスカッション、1対1の対話、電話会話のデータを収集した。トピックやインフォーマントの組み合わせについては、以下に示すようにそれぞれ指定した。インフォーマントの組み合わせと談話のトピックの決定に際しては、事前に行なったトピックに関するアンケートの回答結果に基づいて、インフォーマント同士の意見が異なるように選定した。

まず、グループディスカッションについて、インフォーマントの組み合わせなどを表1にまとめる。グループディスカッションは、4人1組で行ない、1人のインフォーマントがそれぞれ2回ずつ参加する。1回目は同文化内の母語話者同士によるディスカッションで、2回目は異母語話者とのディスカッションである。JJ1～JJ4は日本語母語話者で、2回のディスカッションをいずれも日本語で話す。JK1～JK4も日本語母語話者であるが、1回目のディスカッションは日本語、2回目のディスカッションは韓国語で話す。KK1～KK4は韓国語母語話者で、2回のディスカッションをいずれも韓国語で話す。KJ1～KJ4も韓国語母語話者であるが、1回目のディスカッションは韓国語、2回目のディスカッションは日本語で話す。

表1　グループディスカッションの組み合わせ及び分析時間

| グループ | 使用言語 | 同・異文化 | インフォーマント | トピック | 時間 |
|---|---|---|---|---|---|
| A-1 | 日本語 | 同文化内 | JJ1　JJ2　JK1　JK2 | 1-5 | 15分 |
| A-2 | 日本語 | 同文化内 | JJ3　JJ4　JK3　JK4 | 1-6 | 15分 |
| A-3 | 日本語 | 異文化間 | JJ1　JJ2　KJ1　KJ2 | 1-6 | 15分 |
| A-4 | 日本語 | 異文化間 | JJ3　JJ4　KJ3　KJ4 | 1-5 | 15分 |
| A-5 | 韓国語 | 同文化内 | KK1　KK2　KJ1　KJ2 | 1-5 | 15分 |
| A-6 | 韓国語 | 同文化内 | KK3　KK4　KJ3　KJ4 | 1-6 | 15分 |
| A-7 | 韓国語 | 異文化間 | KK1　KK2　JK1　JK2 | 1-6 | 15分 |
| A-8 | 韓国語 | 異文化間 | KK3　KK4　JK3　JK4 | 1-5 | 15分 |

次に、1対1の対話について、インフォーマントの組み合わせなどを表2にまとめる。1対1の対話は、2人1組で行ない、1人のインフォーマントがそれぞれ2回ずつ参加する。1回目は同文化内の母語話者同士による対話で、2回目は異母語話者との対話である。JJ5とJJ6は日本語母語話者で、2回の対話をいずれも日本語で話す。JK5とJK6も日本語母語話者であるが、1回目の対話は日本語、2回目の対話は韓国語で話す。KK5とKK6は韓国語母語話者で、2回の対話を

いずれも韓国語で話す。KJ5 と KJ6 も韓国語母語話者であるが、1 回目の対話は韓国語、2 回目の対話は日本語で話す。

表 2　1 対 1 の対話の組み合わせ及び分析時間

| グループ | 使用言語 | 同・異文化 | インフォーマント | トピック | 時間 |
|---|---|---|---|---|---|
| B-1 | 日本語 | 同文化内 | JJ5　JK5 | 2-2 | 15分 |
| B-2 | 日本語 | 同文化内 | JJ6　JK6 | 2-2 | 15分 |
| B-3 | 日本語 | 異文化間 | JJ5　KJ5 | 2-6 | 15分 |
| B-4 | 日本語 | 異文化間 | JJ6　KJ6 | 2-6 | 15分 |
| B-5 | 韓国語 | 同文化内 | KK5　KJ5 | 2-2 | 15分 |
| B-6 | 韓国語 | 同文化内 | KK6　KJ6 | 2-2 | 15分 |
| B-7 | 韓国語 | 異文化間 | KK5　JK5 | 2-6 | 15分 |
| B-8 | 韓国語 | 異文化間 | KK6　JK6 | 2-6 | 15分 |

最後に、電話会話について、インフォーマントの組み合わせなどを表 3 にまとめる。電話会話は、1 対 1 の対話と同様に、2 人 1 組で行ない、1 人のインフォーマントが同文化内または異母語話者との会話のいずれか 1 回のみ参加する。JJ7～JJ12 は日本語母語話者で、日本語で話す。JK7 と JK8 も日本語母語話者であるが、異母語話者と韓国語で話す。KK7～KK12 は韓国語母語話者で、韓国語で話す。KJ7 と KJ8 も韓国語母語話者であるが、異母語話者と日本語で話す。

表 3　電話会話の組み合わせ及び分析時間

| グループ | 使用言語 | 同・異文化 | インフォーマント | トピック | 時間 |
|---|---|---|---|---|---|
| C-1 | 日本語 | 同文化内 | JJ7　JJ8 | 2-2 | 15分 |
| C-2 | 日本語 | 同文化内 | JJ9　JJ10 | 2-6 | 15分 |
| C-3 | 日本語 | 異文化間 | JJ11　KJ7 | 2-2 | 15分 |
| C-4 | 日本語 | 異文化間 | JJ12　KJ8 | 2-6 | 15分 |
| C-5 | 韓国語 | 同文化内 | KK7　KK8 | 2-6 | 15分 |
| C-6 | 韓国語 | 同文化内 | KK9　KK10 | 2-2 | 15分 |
| C-7 | 韓国語 | 異文化間 | KK11　JK7 | 2-2 | 15分 |
| C-8 | 韓国語 | 異文化間 | KK12　JK8 | 2-6 | 15分 |

### 3.2　データの文字化

本研究において収集した音声データは、文字化記号を用いて文字化した。なお、文字化の際には発話者の発音を忠実に表記するように努めた。そのため、言い間違いなどもそのままの形で書き起こした。

### 3.3　分析方法

日韓両言語の３種類のデータ、つまり、グループディスカッション、１対１の対話、電話会話の資料を用いて、「言いよどみ」「重なり」「あいづち」について、(1)日本語母語話者による発話、(2)韓国語母語話者による発話、(3)異文化間における日本語母語話者の母語よる発話、(4)異文化間における韓国語母語話者の母語よる発話、(5)異文化間における日本語母語話者の外国語による発話、(6)異文化間における韓国語母語話者の外国語による発話、の順に分析を行なった。本研究では、異なり語数や頻度などの指標として中央値（median）を用いた。その理由は、測定値の中に極端に大きい値や小さい値があっても、その値に左右されないからである。

### 3.4　分析内容

言いよどみについては、(1)言いよどみの異なり語数と頻度、(2)言いよどみの機能、(3)言いよどみの生起位置、(4)言いよどみの音声面、についての分析を行なう。

重なりについては、(1)重なりの頻度、(2)重なりが起こる原因の種類、(3)重なりによる話者交替率及び重なりに占めるあいづちの割合、についての分析を行なう。

あいづちについては、(1)あいづちの異なり語数と頻度、(2)あいづちの機能、(3)あいづちの音声面、についての分析を行なう。

## 4．結果と考察

前述した「言いよどみ」「重なり」「あいづち」のそれぞれの項目について、(1)母語話者同士の発話、(2)異文化間における母語による発話、(3)異文化間における外国語による発話、に分けて分析し、その結果を比較検討した。

### 4.1　言いよどみについて

#### 4.1.1　言いよどみの異なり語数

言いよどみの異なり語数は、同文化内・異文化間、使用言語、母語の違いを問わず、いずれもグループディスカッションにおいて、異なり語数が最も少なかった。ただし、異文化間において日本語で話した日本人については、グループディスカッションと電話会話における異なり語数は、同数

だった。

日本語による談話の中で異なり語数が最も少ないグループディスカッションよりも、韓国語による談話の中で異なり語数が最も多い電話会話の方が、異なり語数が少なかった。このことから、異なり語数の全体的な特徴として、日本語の談話において高く、韓国語の談話において低いという傾向があると言える。これは、渡辺（1985）が指摘しているように、日本人は自分の使用する表現によって生じるさまざまな解釈について気を遣うことがあり、自分の言ったことを相手が妙に解釈した時,どんな読みが可能であるかを見極め,話を進めるといったルールを有しているのに対して、韓国人はこのルールが日本人ほど顕著ではなく、表現の裏側に気をまわし、他の読みの可能性を絶えず気にかける言語習慣は薄いといったことと関連あるのではないだろうか。

### 4.1.2　言いよどみの頻度

母語話者同士による発話における言いよどみの頻度をみると、グループディスカッション、1対1の対話、電話会話のいずれにおいても、韓国語母語話者に比べて、日本語母語話者において多く見られた。これは、渡辺（1985）が述べている「韓国人の直截的表現と日本人の婉曲的表現」と関連があり、日本人の方が韓国人より言いよどみを多く使用していると考えられる。

同文化内・異文化間、使用言語、母語の違いを問わず、いずれも、1対1の対話や電話会話に比べて、グループディスカッションにおいて頻度が低かった。ただし、異文化間において日本語で話した日本人については、グループディスカッションと電話会話における頻度は同数だった。また、異文化間において日本語で話した日本人と異文化間において日本語で話した韓国人を除いて、電話会話における頻度が高かった。

異文化間において日本語で話した韓国人は、その他の場合と比較して、言いよどみの頻度が高かった。これは、外国語で話しているためで、日本語の運用能力が十分ではないからだと考えられる。

### 4.1.3　言いよどみの機能

言いよどみの機能に関して、日本語と韓国語の談話に共通して言えることは、「発話権保持」と「時間稼ぎ」が多かったことである。しかし、日本語の談話においては、「時間稼ぎ」よりも「発話権保持」の方が多いのに対して、韓国語の談話においては、「発話権保持」よりも「時間稼ぎ」の方が多かった。また、日本語の談話においては、「時間稼ぎ」と「発話権保持」に次いで、「心的態度」も多く見られた。そして、「注意喚起」と「話者交替」は、日本語・韓国語ともにあまり見られなかった。

#### 4.1.4　言いよどみが起こる位置

言いよどみが起こる位置については、同文化内・異文化間、使用言語、母語の違いを問わず、日韓両言語の談話に共通しているのは、「文中」が最も多かったことである。そしてそれに次ぐのは「文頭」で、「文末」が最も少なかった。言いよどみが起こる位置については、同文化・異文化、使用言語、母語による違いはなかった。

#### 4.1.5　言いよどみの音節数

言いよどみの音節数に関して、日韓両言語に共通しているのは、「1音節」が多かったということである。それに加えて、日本語における談話については「2音節」も多かった。「3音節」以上については、数が少なく、あまり見あたらなかった。とりわけ、韓国語による発話、即ち、同文化内で韓国人が母語話者同士で話した場合、異文化間で韓国人が韓国語で話した場合、異文化間で日本人が韓国語で話した場合については、「1音節」の言いよどみが多く見られた。これは、「ku(その)類」と「um(うん)」といった1音節の言いよどみが多く使われたためだろう。

#### 4.1.6　言いよどみの子音始まりと母音始まり

母語話者同士の場合、日本語母語話者は、子音から始まる言いよどみがやや多かった。一方、韓国語母語話者については、グループディスカッションで母音から始まる言いよどみの頻度が高い傾向が見られた。また、異文化間での発話の場合も、日本人は子音から始まる言いよどみ多いのに対して、韓国人は母音から始まる言いよどみが多い傾向が見られた。この理由としては、日本語の場合、子音から始まる「ま類」の言いよどみが多く使われており、韓国語の場合母音から始まる言いよどみである「ung(うん)類」が多く使用さていたからだと思われる。子音始まりと母音始まりについては、談話の種類は影響しないようである。

### 4.2　重なりについて

#### 4.2.1　重なりの頻度

重なりの頻度については、全体的に日本語母語話者で高く、韓国語母語話者で低いという傾向がある。これは、都（2001）が電話会話資料を用いて調査した結果と同様の結果である。本研究の結果により、グループディスカッション、1対1の対話についても、電話会話と同様に、日本語母語話者は日本語で話した場合も韓国語で話した場合も重なりの頻度が高いことが分かった。

また、同文化内・異文化間、母語の違いを問わず、いずれの場合も、グループディスカッションや電話会話に比べて、1対1の対話における重なりの頻度が高い傾向が見られた。

### 4.2.2　重なりが起こる原因

日韓両言語の共通の特徴としては、「途中」が多いことが挙げられる。これは、重なりの頻度に占める「あいづち」は、ほとんどが「途中」のカテゴリに含まれているからだと考えられる。そして、この結果は、本田（1999, 2002）の研究と同じ結果である。

「途中」に次いで多いのが「早すぎ」だった。ただし、異文化間において日本語で話した日本人、異文化間において韓国語で話した韓国人、異文化間において韓国語で話した日本人については、「途中」に次いで多いのは「同時発話」で、「早すぎ」は3番目だった。

### 4.2.3　重なりに対するあいづちの割合

重なりに対するあいづちの割合については、同文化内・異文化間、使用言語、母語の違いを問わず、いずれの場合も重なり全体のおよそ半分以上をあいづちが占めていた。これは、本田（2002）で指摘されていることと同様の結果である。そして、グループディスカッション、1対1の対話、電話会話についても同じ傾向だった。つまり、重なりに占めるあいづちの割合については、談話の種類によって相違がないと言える。

### 4.2.4　重なりに対する話者交替率

重なりに対する話者交替率については、同文化内・異文化間、使用言語、母語の違いを問わず、いずれの場合も、グループディスカッションにおいて低く、1対1の対話と電話会話において高かった。このことから、重なりによる話者交替は、人数と関連があることが分かった。つまり、グループディスカッション（4人）の場合よりも、1対1の対話（2人）や電話会話（2人）の方が話者交替が頻繁に生じる傾向がある。

1対1の対話や電話会話において、韓国語母語話者の話者交替率が高かった。これについては、「turn-taking」について述べたSacks他（1974）が指摘しているように、「話の途中で割り込んで話を中断させる」といった重なりの役割が、日本語母語話者と比較して、韓国語母語話者においてより強く働いているのではないかと考えられる。

## 4.3　あいづちについて

### 4.3.1　あいづちの異なり語数

母語話者同士の発話の場合、グループディスカッション・1対1の対話・電話会話において韓国語母語話者に比べ、日本語母語話者において異なり語数が多いことが分かった。日本語母語話者において使用されたあいづちの種類が多かったことについては、黒崎（1987）が論じているように「話し手の立場を大切にしながら話を聞き出すためには、あいづちの多彩さも大いに必要である」とい

ったことと関連があると思われる。

韓国語母語話者については、異文化間において外国語を用いている発話は、母語を用いている発話よりもやや増加している傾向が見られた。

### 4.3.2 あいづちの頻度

あいづちの頻度については、全体的な傾向として、日本人において頻度が高く、韓国人において低かった。これは、堀口（1990）、任・李（1995）と同様の結果である。日本語においてあいづちの頻度が高い原因としては、水谷（1988）が指摘しているように、「日本語の話し方には相互依存の傾向が強い」ということと関係があるのではないだろうか。同文化内において日本語で話した日本人のグループディスカッションや1対1の対話、そして異文化間において韓国語で話した日本人のグループディスカッションは、日本人による談話の中では、あいづちの頻度が低い部類に入る。それに対して、同文化内において韓国語で話した韓国人の電話会話、異文化間において韓国語で話した韓国人の電話会話、異文化間において日本語で話した韓国人の電話会話は、韓国人による談話の中では、頻度が高い部類に入る。これら2つ、つまり、日本人の中であいづちの頻度が低い談話と韓国人の中で頻度が高い談話において観察されたあいづちの頻度は、ほぼ同程度ある。

異文化間において日本語で話した日本人を除いて、同文化内・異文化間、使用言語、母語を問わず、グループディスカッション、1対1の対話、電話会話の順にあいづちの頻度は高くなる傾向が見られた。人数が少ない方があいづちの頻度が高くなり、対面より非対面の方があいづちの頻度が高かった。

### 4.3.3 あいづちの機能

本論文では、あいづちの機能について5つの種類に分類し、図1のようなあいづちの機能モデルを作成した。例えば、「理解している」という機能は、「聞いている」ということが前提になるため、「聞いている」という範疇に含まれる。

あいづちの機能については、同文化内・異文化間、使用言語、母語を問わず、最も多いのが「聞いている」という機能だった。これは、堀口（2000）、松田（1988）、ザトラウスキー（1993）と同様の結果である。そして、それに次ぐのが「理解している」と「同意」である。この2つは、談話の種類によって、どちらの機能が多いかが異なる。「否定」は、すべての談話に共通して、あまり見られなかった。これらのことから、日本語と韓国語のあいづちの使用における機能は類似していると言える。

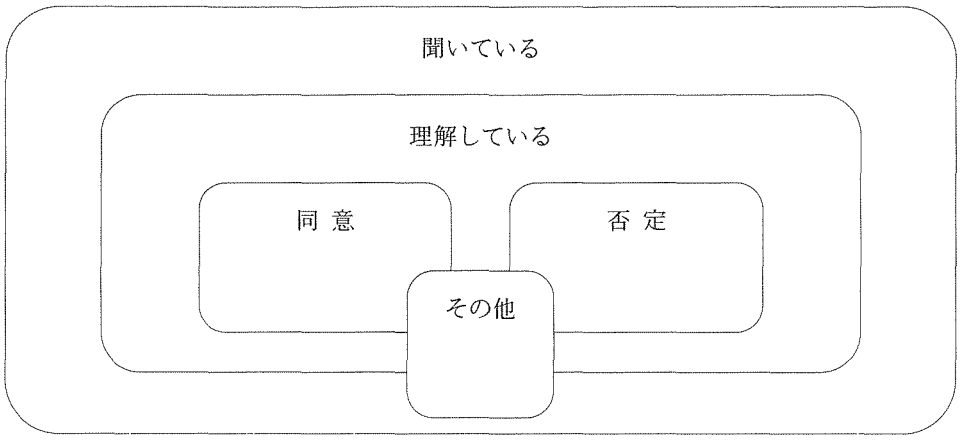


図1　あいづち機能のモデル

#### 4.3.4　あいづちの音節数

あいづちの音節数については、異文化間において日本語で話した日本人、異文化間において日本語で話した韓国人を除いて、いずれの談話も「1音節」が最も多かった。先に挙げた2つの談話も、「1音節」は2番目に多かった。

「2音節」は「1音節」に次いで2番目に多く、「3音節」以上はあまり見られなかった。

#### 4.3.5　あいづちの子音始まりと母音始まり

著しい特徴は、母語、談話の種類を問わず、韓国語を用いた発話においては母音始まりのあいづちが多く見られたことである。これは、韓国語の場合、母音から始まるあいづちである「ung(응)類」「yey(예)類」の頻度が高かったからであると思われる。

日本語による発話の場合は、母語とは関係なく、子音から始まるあいづちの頻度が高かった。そして、その頻度が高い順に、電話会話、対話、グループディスカッションとなっていた。この理由としては、グループディスカッションにおいて、「うん類」のあいづちが多く、電話会話や対話では「はい類」のあいづちが多いことが影響していると考えられる。このように、日本語と韓国語の間に差が現れた理由は、日本語の「はい」の意味をつ韓国語の「yey(예)」は、母音にあたるからであると考えられる。

## 5．おわりに

本研究で扱った「言いよどみ」「重なり」「あいづち」に関する研究は、あいづちを除くと、その数自体があまり多くはなく、どちらかというと、あまり注目を浴びてこなかった。それは、外国語教育の現場でも同様で、「言いよどみ」「重なり」「あいづち」に関して、教科書の記述や教師による指導がほとんどないのが現実である。

言いよどみは、話しことばの特徴の１つであり、発話の途中で頻繁に出現する。そして、自然な発話を図る上で重要な要素であると考えられる。堀口（1985）は、日本語教育で使用される教科書ではほとんど取り上げられていないことや、「なんという」「なんというと」といった言いよどみの誤用が多く見られるため、積極的に指導する必要性があるということを指摘している。

重なりについては、重なりによる話者交替（turn-taking）が起こる場合が多々ある。話者交替が起こる際、自然なコミュニケーションを保つためには、聞き手は、話し手への配慮を示しながら発話権を確保する必要がある。これらについては、外国語教育を行なう際に、積極的に取り上げて指導していかなければならないだろう。

畠（1982）は、外国語教育においては言葉そのものを教えることよりも、言葉の使い方を教えることが重要である、と指摘している。つまり、コミュニケーションに関する規則を知ることが大事なのである。あいづちは、コミュニケーションを円滑に進めるために重要な要素であると認識されて久しい。今日、あいづちは、日本語教育の分野において、注目され、しばしば取り上げられるようになった。特に、韓国人日本語学習者にとっては、学習上、重要な分野であると思われる。一方、韓国語の（maccangkwu［맞장구］、あいづち）は、韓国語教育の現場において、未だに扱われることはほとんどない。また、maccangkwu（あいづち）研究においても、日本語に比べて、その数は極端に少ない。

本研究では、日本人および韓国人を対象にして、同文化内の母語話者同士、異文化間の母語、異文化間の外国語によるグループディスカッション、１対１の対話、電話会話を発話データとして収集した。そして、「言いよどみ」「重なり」「あいづち」についての分析を行なうため、(i)日本人が母語話者同士で話している場合、(ii)韓国人が母語話者同士で話している場合、(iii)日本人が韓国人と日本語で話している場合、(iv)韓国人が日本人と韓国語で話している場合、(v)韓国人が日本人と日本語で話している場合、(vi)日本人が韓国人と韓国語で話している場合について、グループディスカッション、１対１の対話、電話会話に分けて、比較検討を行なった。

今後は、異なるタイプのデータを用いて本研究との比較を行ないたいと考えている。また、本研究と関連付けて、親疎関係・年齢・性別など会話参加者の属性による影響を見据えた分析も必要になるだろう。

参考文献

任栄哲・李先敏（1995）「あいづち行動における価値観の韓日比較」『世界の日本語教育』５、239-251.

窪田彩子（1999）「初級・上級日本語学習者の初対面時に使用する相づちについての一考察」『平成11年度日本語教育学会』.

黒崎良昭（1987）「談話進行上のあいづちの運用と機能－兵庫県滝野方言について－」『国語学』150、109-

122.
小出慶一（1983）「言いよどみ」『話しことばの表現』、81-97（水谷修編）筑摩書房.
小宮千鶴子（1986）「あいづち使用の実態－出現傾向とその周辺－」『語学教育論叢』第3号、43-62、大同文化大学語学教育研究所.
Sacks, Harvey, Schegloff E A. and Jefferson G (1974) A Simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation. *Language*, 50, 4, 696-735.
ザトラウスキー・ポリー（1993）『日本語の談話の構造分析－勧誘のストラテジーの考察－』くろしお出版.
都　恩珍（2001）「日・韓両言語の重なりをめぐって－コミュニケーションへの影響を中心に－」『筑波応用言語学研究』第8号、57-70.
日本国語大辞典第二版編集委員会小学館国語辞典編集部編（2000）『日本国語大辞典　第二版　第一巻』小学館.
野村美穂子（1996）「大学講義における文化系の日本語と理科系の日本語－フィラーに注目して－」『文教大学教育研究所紀要』第5号、76-93、国立国語研究所日本語教育センター.
橋内　武（2000）『ディスコース』くろしお出版.
畠　弘巳（1982）「コミュニケーションのための日本語教育」『言語　10周年記念臨時増刊』第11巻第13号、56-71.
堀江　薫（1998）「コミュニケーションにおける言語的・文化的要因－日韓対照言語学の観点から－」『日本語学』9月臨時増刊号、118-127.
堀口純子（1985）「話ことばに迫る」『応用言語学講座1　日本語教育』明治書院.
堀口純子（1988）「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」『日本語教育64号』13-26.
堀口純子（1990）「上級日本語学習者の対話における聞き手としての言語行動」『日本語教育』71号、16-31.
홍사만（1995）『한일어대조어학/논고』塔出版社.
（ホンサマン（1995）『韓日語対照語学／論考』塔出版社）
本田明子（1999）「第9章　発話の「重なり」と談話進行」『女性のことば・職場編』197-212、ひつじ書房.
本田明子（2002）「第11章　発話の「重なり」にみられる日本語談話進行の特徴」『男性のことば・職場編』167-178、ひつじ書房.
Maclay & Osgood (1959). *Hesitation phenomena in spontaneous English speech*, Word 15, 19-44.
松田陽子（1988）「対話の日本語教育学－あいづちに関連して－」『日本語学』第7巻12号、88-92.
水谷信子（1988）「あいづち論」『日本語学』第7巻12、4-11.
メイナード・K・泉子（1987）「日米会話におけるあいづち表現」『言語』第16巻第12号、88-92.
Maynard, Senko K. (1989) Japanese Conversation: Self-contextualization through Structure and Interactional Managenent. Norwood, NJ: Ablex.
メイナード・K・泉子（1999）『談話分析の可能性』くろしお出版.
山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィラー』くろしお出版.
山本恵美子（1992）「日本語学習者のあいづち使用実態の分析－頻度および種類－」『言語文化と日本語教育』4、22-34.
渡辺吉鎔（1985）「会話分析にみる日・韓コミュニケーションギャップ」『言語・文化・コミュニケーション』1、132-175、慶應義塾大学紀要.

# 論文審査結果の要旨

本論文は、独自に収集したデータに基づいて、従来あまり研究されていない日韓両言語の対照談話分析を行ったものである。日本語母語話者と韓国人日本語学習者の間に如何なる類似点、相違点があるかを検証し、日韓両言語の談話マーカー、「言いよどみ」「重なり」「あいづち」の分析を通して、両言語の談話管理の特徴を明らかにしている。収集したデータを分析した結果、これまで類型的に近い言語と考えられてきた日本語と韓国語には、文化的な差異を背景にしたコミュニケーションスタイルの違いがあることを突き止めた。着想に独自性が認められ、設定した問題を解決するための研究方法も妥当なものである。

第1章序論の「研究目的」において、「言いよどみ」、「重なり」、「あいづち」の言語現象の分析を通して、日韓両言語のコミュニケーションスタイルの違いを考察することを目的としてあげている。第2章の「談話分析理論の概観」においては、言語学における談話分析の理論を比較した上で、「青いよどみ」、「重なり」、「あいづち」についてそれぞれこれまでなされている日本語と韓国語双方の研究を検証している。第3章の「研究方法」においては、様々な状況におけるコミュニケーションスタイルを調査するための方法が詳細に述べられている。すなわち、談話の種類としてグループディスカッション・一対一の対面対話・電話による非対面対話を取り上げ、話者として日本語母語話者が日本語で話す場合と、韓国語で話す場合、韓国語母語話者が韓国語と日本語で話す場合を研究対象としている。第1章、第2章、第3章の内容および構成の仕方は、研究テーマに鑑みて過不足なく妥当なものである。

続く第4章、第5章、第6章はそれぞれ「言いよどみ」「重なり」「あいづち」について、定義と先行研究の検証、及び実際に得られたデータ分析を行っている。データの処理と分析方法および考察は適切に行われている。

第7章「総合的考察」においては、第4、5、6章において得られた結果を基にして母語話者同士の発話、異文化間における母語による発話、異文化間における外国語による発話と分けて、「言いよどみ」、「重なり」、「あいづち」のそれぞれの項目について総合的な分析を行い、日韓両言語のコミュニケーションスタイルの特律を浮かび上がらせている。

最後にこの研究で得られた成果を基にして、「言いよどみ」、「重なり」、「あいづち」に関して、教科書の記述や教師による稽導が殆どない現実を踏まえて、異文化間接触では、相手の文化的背景やコミュニケーションスタイルの違いの認識が必要であるので、それらの指導の重要性を日本人韓国語学習者と韓国人日本語学習者へ提言している。本論文で扱われた幅広い状況における長時間にわたる研究データはあまり例がなく、これ自体が非常に信頼度が高いものである。したがって、これによって得られた実証的・理論的分析も非常に信頼度が高く、その成果は、論文提出者の研究者

としての高度な研究能力と学識を示すものである。よって、本論文は、博士（国際文化）の学位論文として合格と認める。